

IF-5 失語発作を中心とする精神発作重積を呈した一症例

*駒木野病院

北里大学医学部精神科

*岡本呉賦

高橋明比古, 石井善輝, 稲見允昭, 村崎光邦

われわれは失語発作を中心とする精神発作重積を呈した一例を観察する機会を得たので報告する。患者は54歳の女性で、36歳時就寝中に全身痙攣発作が出現、その後12年間に4回同様の発作が認められ、この間に、急に漢字の意味が分らなくなる、話そうとおもっても声が出ない、電車に乗っていて突然自分の行先が分らなくなるといった発作も存した。昭和52年9月(48歳)、精査目的にて北里大学病院精神神経科に入院、日本住血吸虫症に罹患していることが判明し、同症による部分発作とその二次性全汎化と考えられ、駆虫療法とdiphenylhydantoin(DPH)の投薬が開始された。日本住血吸虫は直腸生検により良好な駆虫効果が認められ、てんかん発作もよくcontrolされたためDPHは昭和54年(50歳)までに漸減のうえ中止した。昭和57年11月25日(54歳)早朝より全身倦怠感、頭痛が出現、同時に自分の話したいことが話せなかったり、相手の話す意味が分らなくなる発作が出現しはじめ、断続的に終日続いた。翌26日にも同様な状態が続くため当科を受診し、直にEEGを記録したところ、左後頭葉から始まる速波が漸次振巾を増しながら左半球全体に波及するとともに、周波数を減じて最後に大徐波となって終了する発作パターンが上記の臨床発作と一致して断続的に出現することが確認された。なお2時間の記録時間中に1.5~12分持続する発作パターンが12回認められている。主観発作の他には自動症などの行動上の変化は認めず、発作パターン出現中も患者は検者の質問に応答し、見当識もほぼ保たれていたが、時に軽度の意識変容と思われる所見を呈した。失語発作を中心とする単純部分発作重積と考えてcarbamazepine(CBZ)600mg/日の投与を開始した。翌27日も重積状態が終日持続するとともに、発作の持続時間と間隔が規則化してきたが、翌28日の早朝に至り、72時間持続した重積状態から脱した。その後今日までCBZ 400mg/日によって発作は全てcontrolされている。

IF-6 三相性棘徐波結合を伴い Spike-Wave Stupor と考えられる意識障害を呈した副腎機能不全症の1例

虎の門病院神経内科

内瀉雅信, 野沢胤美, 塩沢瞭一, 安芸基雄

棘徐波結合を伴って昏迷状態を呈す Spike-Wave Stupor(Niedermeyerら)は、てんかん以外にもうつ病や肝脳疾患に認められることが最近報告されている。演者らは、副腎機能不全症の1例で同様な意識障害を経験したので報告する。

症例: 54才男性, 農業。

既往歴: 44才時頭部を打撲し一過性に意識消失。

現病歴: 1970年10月食思不振、疲労感強く、感冒を契機に意識レベルが低下。呼びかけには応ずるも食事・トイレに介助を要した。しかし、抗生剤投与後症状は改善。翌年、翌々年にも同様なエピソードを呈した。1973年発熱と同時に意識低下をきたし某医大入院。脳波は三相性波を示した。肝機能には著変ないも肝生検にてhealed hepatitisの所見が得られ、肝脳疾患が疑われた。1974年咽頭痛と発熱を契機に意識レベルが低下し当科入院。

入院時現症: 血圧102/74, 脈拍60/分, 体温36.4℃。軽度貧血症だが黄疸なし。肝2横指触知。応答は比較的正確で、見当識も保たれていたが、全体に犬儀そうで、発語も乏しかった。神経学的には深部反射を含め著変なし。

検査所見: 軽度貧血と血沈亢進以外には、血液生化学、尿、血液ガス等に異常なし。胸部X-Pは巣状肺炎を示す。髄液は、細胞数、蛋白量に異常なく、糖低下、しかし結核菌、真菌、ウイルスは検出されず。頭部CTと気脳写は軽度の脳室拡大を示す。脳波は広汎な3Hz前後の三相性棘徐波結合を示した。内分泌学的検査は、血中コルチゾルの低下・日内変動の消失、ACTH試験陰性とアジソン病を示唆した。その他、甲状腺機能、糖負荷試験は正常。

肺炎の治療に加え、ハイドロコルチゾン投与したところ、活気のなさ、発動性低下等の昏迷状態は改善し、これに伴い脳波も改善した。代謝性脳症(副腎不全)の立場から、Spike-Wave Stuporの発現について考察する。